
桜恋歌

星河七海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜恋歌

【Nコード】

N8733H

【作者名】

星河七海

【あらすじ】

深織は夢の中でどこか懐かしい笛の音を耳にする。早起きした深織は、窓から見えた季節はずれの桜を辿って、近くの屋敷を訪れた。平安時代のような風格が漂う屋敷から聴こえてきたのは、夢で聴いた笛の調べだった。

透き通るような笛の音が、どこからか聴こえてくる。そんな不思議な夢を見た。

切なく、物悲しい、だけど……どこか懐かしい音色。遥か遠い遠い古の時代に、同じ音色を聴いたことがある。でも、何時どこで聴いたのかは、記憶に魔法の鍵をかけられたみたいで、思い出すことはできなかった。

低血圧な私は、毎朝意識を朦朧もつろうとさせながらゆっくりと起きる。でも、その日だけは違っていた。親に起こされもせず、家の誰よりも早く起きた。眠気も嘘のように無くなって、神経が研ぎ澄まされたような感覚だった。布団の中から鳥のさえずりを、識別して分類できくらいだから、相当なものだと思う。すぐに起き上がり、カーテンを開けた。まだ太陽も起きたばかりなのか、優しい日差しを放っている。そっと窓を開けて、朝の心地よい空気を吸い込み、大きく深呼吸をした。視界に薄紅色がちらついた。よくよく目を凝らして見ると、森の深い緑に紛れ、薄紅の桜が一際異彩を放っていた。

「あれ？まだ桜が咲いてる……」

四月と言えど、この地域の桜の見頃はとくに過ぎたはず……。学校に行くにも早いけど、たまには寄り道して行こう。私は急いで制服に着替え、軽く朝食を済ませて、忍び足で家から出ていった。森に入ると草木が、でたらめに生い茂っているせいか、少し薄暗い。しばらく歩いていると、やがて大きな屋敷に辿り着いた。

「こんな場所に民家なんてあったっけ……？しかも、こんな大きなお屋敷……」

早朝という、あまりにも非常識な時間。「無駄足だったかな」と思いつつ、踵を返した。その時、今朝見た夢と同じ音色が、そのお屋敷から聴こえてきた。自分の耳を疑ったが、私は吹奏楽をやっている。

るため、音感だけは確かだった。間違いなく夢と同じ奏者だ。私はスカートを履いていることを気にも留めず、美しい音色に魅せられるように、傍に植えられていた大木の枝を伝い、私はその屋敷に忍び込んだ。

一瞬、空気が変わった。空気がゆがんだと言った方が近いかもしれない。枝から器用に飛び降りた後、振り返ってあやしげに宙を見つめた。だけど、いつも見ている空と何ら変わりない青空だった。次の瞬間、目の前の風景に愕然と立ち尽くした。

そこは、まるで別世界だった。平安時代の貴族住宅を切り取ったような寝殿造。庭園には躑躅が咲き乱れ、季節折々に楽しめる様々な種類の花が植わっていた。紅の反橋から見る大きな池には、赤と黒い二匹の錦鯉が優雅に泳いでいる。外の世界に干渉も影響もされず、大切に守られてきた平安の雅は華々しい美しさと儼かな美しさを併せ持っていた。笛の音は、庭内からどこからか聴こえていた。霞むような調べなのに、はつきりと整った音階と研ぎ澄まされた奏で手。その音源はどうやら、庭の片隅に堂々と咲き誇っている桜の大木からだと感じ取り、私はそっと桜の大木に近付いてみた。

桜の精。

妖精などの類を信じてない私でも、彼女を一目見てそう確信した。馬鹿な話かもしれない。でも、本当にそう感じた。凜とした顔立ち、白い着物に似た装束を身に纏って、時を越えて平安からやってきたような少女。漆黒の揃えた長髪は春風にもてあそばれ、波打つその髪に桜の花弁が流れていく。簡単に折れてしまうような手先を巧みに使って、金色の龍の装飾が施された竜笛を吹いていた。刹那、音は止んだ。春風が二人の間を風いでいく。彼女は鳶色の双瞳を軽く細め、じっと私を見つめていた。

「そなたは？」

「わ、私はみおり。宮吹 深織」

何だかとても緊張していて、声の上擦ってしまった。だから、「宮吹」と名乗った時の彼女の表情は読み取る事ができなかった。でも

小さな身体を、兎のようにぴくつと震わして反応したことは見間違えではないと思う。

「我は、鈴珠^{りんじゆ}。そなた：どうやってここに入れた？」

「杏の枝をつたって：おっとと。えーと、その笛の音に魅入られちゃって：ってなんか言い訳にしか聞こえないわよね」

深織はどうやって許してもらおうか、と頭の中で考えながら一人で「うーん」と唸っていた。そんな深織を見ながら、鈴珠は目を軽く閉じて門番兼護衛の任に就いている祐^{たすく}に問い掛けてみた。

『結界はどこも異常ありません。結界にどうやって入ったのでしょうか？』

『ふ：む、異客^{いきゃく}か』

目を開けて「何故に、ここへ来たのだ？」と鈴珠はいぶかしげに問い掛けてみた。

「：桜が見えたからかなあ。この時期なのに珍しいなあって。でも、ごめんなさい」

それは、鈴珠にとって意外な答えであり、気の遠くなるような年月を経て待ち望んでいた瞬間だった。鈴珠は、うなだれている深織を、愛しむような優しい眼差しで見つめて言った。

「何故謝る？そなたは悪くないはずであろう？」

「でも、でも：」

「……良い。そなたにさっきの曲聴いて貰おう。最初で最後の調べを。あの陽の光が屋敷に射し込む頃、出て行くと良いぞ」

「あ、ありがとう」

私は美しいは調べを聴きながら、昔を思い出していた。あれは、十歳くらいの頃。祖父母の家で住んでいたことがあった。今住んでいる隣町にその家はあるのだが、好奇心旺盛だった幼い私は、言い付けを破って庭にある立派な倉に入ってしまったことがある。ちょっとした事故でその倉から出られなくなって、家族は勿論、警察を巻き込んだ大騒動になってしまった。そのせいで、祖父母の家に分別がつく年になるまで行かせてもらえなくなったのは、ちょっとした

余談だが……。あの倉から、出れなくなってしまった時にある青年に出会った。彼は外に出れる通路を知っていて、条件付で教えてくれた。「これから紡ぐ詩を覚えてくれたら、通路の場所を教えてあげる」そう言っ、彼は言葉を一つ一つ紡いで聞かせてくれたっけ。笛の音がふいに途切れた。太陽はいつの間にか、少し見上げるほどの位置に昇っていた。

「本当に綺麗な調べ……。そうだわ！ちょっと待ってね」

私は鞆から慌てて紙を出して、聴かせてくれたお礼として彼に教わった詩を書き綴った。

「よし。この歌詞を貴女に贈るわ。素敵な音色を聴かせてくれて、どうもありがとう。それじゃ、鈴珠。もう……。行かないと」

「……生まれ変わってもそなたは、また我を一人残していくのだな」「え？」

寂しそうに切なげな表情で彼女は何かを呟いたが「何でもないわ」とにっこりと笑って言った。

「さようなら、鈴珠。あなたに出会えて良かったわ」

最後に呟いた言葉は分からなかったけど、私は素直にそう言って笑った。

深織が屋敷を出ると、鈴珠はふうと息をついて呟いた。

「織也と同じ事言うなんて、皮肉なものね……。さようなら、織也の生まれ変わり」

その呟きは、宙で風に掻き消されてしまった。

鈴珠がまだ幼い頃、貴族の屋敷の宴に招かれたことがあった。幼少の頃に母が他界し、母の形見として龍笛を持っていた。私の音色は、巷でたちまち噂になり、貴族の宴に奏者として招かれた。その時、桜の大木の懷で青年が短歌を詠んでいた。その青年の名は『織也』。優しいが故に儚い人生だった。医者も手を尽くしたが、出会って半月もしないうちに私と約束を置いて、あの世へ先立った。私と織也は、ある約束をした。

「鈴珠の作ったこの曲。あれに見合う歌詞をつけてあげるよ」

「本当？じゃあ、この曲は私たちの曲になるのね。約束よ？絶対ね！」

「ああ、約束する」

自分の小さい小指をしっかりとした小指に絡めて、二人は小さな小さな約束をした。小さかったけど二人にとっては、大切な約束だった。

半月経って、織也は床に伏すことが多くなった。だから、医者に今夜が峠とうげだと聞かされた時は織也が泣かない代わりに、私が泣いた。約束と死への恐怖だけで泣いていたわけじゃなかった。死に向かっていく、織也を見ているだけで何もできない悔しさとやるせなさで泣いてしまった。約束なんて二の次。織也さえ生き長らえてくれれば……と。

「泣かないで、鈴珠」

「嫌よ、嫌！そんなの絶対に嫌！約束破るなんて酷いじゃない！」

「……ごめんね、鈴珠。貴女に出会えて良かった」

「ねえっ、待って！私を置いて逝かないでよおおおお！」

鈴珠の悲痛な叫びは織也に届かず、春の雨雲だけを呼び覚まし、その翌日には桜の涙が地面を覆った。

「酷い人ね。私をこんなに待たせて……」

どうしても死にきれず、約束のために待ってもらった命の刻限。外界に気付かれないように暮らして、約束の時を待つのであれば『時のない世界』を作ってあげよう、しかし気付かれてしまったら命をすぐに冥府に送る。これが冥府めいふの役人の出した条件だった。

『鈴珠様。約束の時です、行きましょう』

「祐、長い間……本当に有難う。もし織也に会っていなかったら……私は貴方を……」

『……私は、幸せでしたよ？』

「最期の最期まで、貴方という人は……」

薄紅の　ひとひら薫る　涙のごとき
嵐に　舞い散り　春の淡雪
水面に浮かぶ　花弁の杯
遅れ桜は　哀しき涙
憂い瞳に何を思ふ

F i n .

（後書き）

確か、平安の寝殿造の様子を書きたくて、桜も書きたくて、この作品が生まれました。

最後にある恋歌は、頑張って考えました。とりあえず、苦手でも雰囲気が出てればいいじゃないか！！

短歌とか詩とか作ってる人に怒られそうだけど……。ははは。余談ですが、鈴珠の喋り方は結構気に入ってました♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8733h/>

桜恋歌

2010年10月21日22時14分発行